

## ティナ スティリアンド ギリシャ出身の元キリスト教徒

説明： イスラームへの憎悪を植え付けられてきたギリシャ人女性が、イスラームに改宗します。  
よりティナ スティリア

掲載日時 28 Sep 2015 - 編集日時 28 Sep 2015

カテゴリ： [記事](#) > [新改宗者ムスリムの逸話](#) > [女性](#)

私はギリシャのアテネ市で、ギリシャ正教会の家庭に生まれました。父の家族はトルコのイスタンブールで人生の大半を過ごしており、父はそこで生まれ育ちました。彼らは裕福で教養もあり、ムスリム諸国で暮らす殆どのキリスト教徒たち同様、彼らもその宗教を堅持していました。



あるとき、トルコ政府がギリシャ国民の大半を国外退去にし、その資産 家屋 事業を押収するという決定を下しました。よって父の家族は手ぶらでギリシャに帰国せざるを得ませんでした。これが、トルコのムスリムたちによる彼らへの仕打ちであり、彼らによれば、このことが彼らのイスラームに対する憎悪を正当化させたのです。

母の家族はギリシャとトルコの国境に位置する島に住んでいました。トルコの侵攻によって島は占拠され、家々や焼き討ちにあい、生きるために彼らはギリシャ本土に逃れました。彼らがトルコのムスリムたちを憎悪するさらなる理由です。

ギリシャは400年以上に渡りトルコ人から占領され、私たちはギリシャ人に対するあらゆる犯罪がイスラームの責任であることを教えられてきました。トルコ人たちはムスリムであり、彼らの犯罪は彼らの宗教的な思想の反映であるということでした。

このことは、ギリシャ正教会（ギリシャでは政教一致体制が採られています）による、彼らの宗教を保護し、人々がイスラームへ改宗することを妨げるための、ギリシャ人の心にイスラームへの憎悪を植え付ける非常に狡猾な計画でした。

このように、数百年間に渡って私たちは歴史と宗教の書物からイスラームという宗教への憎悪を抱き、嘲笑することを教えられてきたのです。

実際、私たちの書物の中ではイスラームは宗教ではなく、ムハンマド（彼に平安あれ）は預言者でもないのです。彼はユダヤ教とキリスト教から規定や法を寄せ集め、そこに自らの発想を加え、世界を征服した非常に頭脳明晰な指導者 政治家ということになっています。

私たちは学校で、彼と彼の妻たち、そして教友たちを揶揄することを学びます。現在、メディアで流される彼に対するあらゆる風刺画や中傷は、実際に私たちが授業で学び、試験

を受けていたことなのです。

アルハムドゥリッラー（神に讃えあれ）、アッラーは私の心をお守りくださり、イスラームに対する憎悪は入り込みませんでした。

他のギリシャ人たちも、正教会による宗教的遺産を双肩に担わされた状態から抜け出すことに成功しています。彼らはアッラーの御意によって両目、両耳、心を開き、イスラームがアッラーによる真の宗教であり、ムハンマドが真の預言者かつ最後の預言者であることを理解しています。

ムスリムは、アッラーが人類にアダムを始めとしてノア、アブラハム、イシュマエル、イサク、モーゼ、そしてイエス（彼ら全員に平安あれ）といった諸使徒を遣わせて人類を導いたことと、さらにアッラーの最後の教えは預言者ムハンマド（彼に平安あれ）に啓示されたことを信じています。

私の両親が特に宗教的ではなかったことは、大きな助けとなりました。彼らは殆ど宗教の実践はせず、私を教会に連れて行ったのは結婚式や葬式といった機会だけでした。

父が宗教から遠ざかったのは、彼が日常的に目撃していた司祭たちの間の腐敗でした。彼らは神や善行について説いておきながら、同時に教会の基金からお金を盗んだり、別荘を購入したり、メルセデス ベンツを所有したり、同性愛行為を広めたりしていたのです。そうした者たちが、宗教の誠実な代弁者として私たちを導き、正し、神へより近づけてくれるというのでしょうか？ 父はそうした者たちに愛想を尽かし、とうとう無神論者となったのです。

教会は彼ら自身の行為によって、最低でも私の国では大半の支持者を失いました。イスラームでは、宗教におけるシャイフあるいは学者たちは純粋な情熱、そしてアッラーのご満悦を得るといった目的のみによって他者を助け、導き、樂園への道を獲得しようと奮闘しているのです。

キリスト教において司祭になるということは、高収入の職業を得ることです。こうした内部の腐敗は、キリスト教徒として生まれたたくさんの若者たちを宗教から遠ざけ、彼らに他の何かを探求させることにつながっています。

10代の頃の私は読書をこよなく愛しており、キリスト教に満足しているわけでもなければ確信を抱いているわけでもありませんでした。私は神を信じ、恐れ、愛していましたが、その他の物事によって混乱させられている状態でした。

私は身近なところから探索を始めましたが、イスラームにたどり着くことはありませんでした（おそらく、私の生まれ育った背景がそうさせたのかも知れません）。

アルハムドゥリッラー、神は私の魂にご慈悲をくださり、私は暗闇から光へと、地獄から天国（神の御意であれば）へと導きになりました。

神は私の人生にボーンムスリムの夫をもたらしになり、私たちの心にお互いへの愛情を植え付けになり、宗教的な相違点に注意を払うことなく結婚へとたどり着きました。

夫は私の信仰（たとえそれがいかに間違っただけであれ）について屈辱を与えることなく、自身の宗教についていかなる質問にも答える準備をしていました。そして私に改宗への圧力をかけるどころか、それを求めることすらしませんでした。

3年間の結婚生活を経て、イスラームについてより良い知識を得て、聖クルアーンを読み、その他の宗教的な本を読んだあと、私は三位一体というものの存在がないこと、そしてイエスは神ではないことを確信しました。

ムスリムは唯一無二 無双であり、子をもうけず、同位者なき神以外には、何ひとつとして崇拝される権利を有さないことを信じます。何ひとつとしてその神格性と特質を神と共有することはないのです。

クルアーンにおいて、アッラーは自らをこのように説明されています。

“ 言え、「かれはアッラー、唯一なる御方であられる。アッラーは、自存され、御産みなさらないし、御産れになられたのではない、かれに比べ得る、何ものもない。」 ” (クルアーン112:1-4)

アッラーその御方以外には、何ひとつとして呼びかけられたり、祈願や礼拝、または崇拝行為の対象とされたりする権利を持っていないのです。

イスラームという宗教は、最終預言者ムハンマドに啓示されたアッラーの教えを認め、服従することです。

私がムスリムになったことは、家族や友人たちから長年に渡り隠し続けてきました。私たちは夫と共にギリシャに住みつつもイスラームを実践しようと試みましたが、それは極度に困難ただけでなく、ほぼ不可能に近いものでした。

故郷の街にはモスクだけでなく、イスラーム学習の場がなく、誰も礼拝をしたり断食をしたり、ヒジャーブを着けている女性がいませんでした。

そこには一部のムスリム移民がいましたが、彼らはより経済的な将来を求めてギリシャに住み着き、西洋の生活スタイルへの憧れから自らを墮落させたような人たちだけでした。その結果、彼らは宗教に従わないばかりか、完全に道を踏み外したような人々でした。

私はムスリムとして生まれなかったため、イスラーム的教育を受けておらず、イスラームの義務を果たすことは、私にとって信じ難いほど困難でした。

私と夫はカレンダーを用いて礼拝や断食を行い、そこではアザーン(ムスリムによる礼拝への呼びかけ)を聞くこともできなければ、援助してくれるイスラームのウンマ(ムスリム共同体)もありませんでした。日時が経つにつれ、私たちは逆行しているように感じました。私たちの信仰心は減少し、周りの荒波に飲み込まれてしまいそうでした。

そのため、娘が生まれたとき、私たちの魂と娘の魂を救うため、神の御意であればムスリム国家に移住することを決断しました。娘を西洋的な環境で育てることから彼女が自らのアンデンティティを喪失してしまわないよう望みました。

アッラーに感謝あれ。アッラーは私たちをお導きになり、私たちが甘美なアザーンの言葉を耳にすることができ、知識、そしてアッラーとその預言者ムハンマドへの愛情を増加させることのできるムスリム国家に移住する機会を与えてくれました。

この記事のウェブアドレス：

<http://www.islamreligion.com/jp/articles/2771>

Copyright © 2006-2015 [www.IslamReligion.com](http://www.IslamReligion.com). All rights reserved.